

北海道価値創造パートナーシップ会議 in 岩見沢 ～新たな北海道総合開発計画に向けて～  
出席者の意見概要

**【世界水準の価値創造空間について】**

- 観光に関して、素晴らしいガーデンは道内各地に存在しており、ガーデン街道の他にも様々なルートを開拓し魅力を発信してほしい。地域の関係する主体が連携して物語（ストーリー）を作っていくことも重要。
- 農業の問題は農業だけでは解決できない。ステークホルダーとともに世代を越えて取り組むことが重要。農村と都市が共存できるバランスが大事であり、都市住民が、ともに仲間として参加するなど役割を果たすことも必要。
- 北海道の生産空間ほど豊かな場所はない。新しいことに取り組みやすく、新たな人を受け入れる環境があることから、将来は暗くないと考える。
- 農地の規模拡大で生き残りを図っていかなければならず、若者は収益性の追求に追い込まれている。自らが地域や農業に魅力を感じることで地域を守ることができる。

**【定住環境の整備・対流の促進について】**

- Iターンでいきなり生活をシフトするのは難しい。お試しや練習できる環境や期間が必要。Iターンだけでなく半町民的に通ってくる人も加えれば、中間的なグラデーションのあるコミュニティも考えられる。
- 人が暮らす際には、子育ての環境が重要。子どもの遊び場が少なくなり、トップレベルの能力の低下、糖尿病発症という問題が生じる。冬でも屋外で活動できるような遊びの場をつくる仕掛けをどう考えていくかが大事。
- 空いている家は多いが、農家には家を売る感覚がない。誰かに貸してあげても良いという声が出ない。市場に流通するのは市街地に限られている。本州の方には空き家でも面倒で貸さない人もおり、地元の人の仲介で信用し貸し出す例もある。
- 地域のコミュニティに関して、移住者を温かく受け入れている。町内会会合への出席や草刈りや清掃などの活動を通じて移住者が地域に溶け込む努力も必要。移住者には町内会参加を義務づけている地域もある。
- 冬季集住が他地域で展開されないのは、本当に困っていないからではないか。最近是一年中集住したいという要望があり、実験的に取り組んでいる。資金をどう捻出するかが課題。
- 障がい者であっても他の人と同じようにできる環境であれば、障がい者ではなくなる（例えば、車の運転）。バリアフリーの考え方を広げれば、障がい者の活動の場が広がっていく。

**【雇用の維持・創出について】**

- 移住者の仕事は農家の手伝いや除雪作業など安定しないものが多く、諦めて地域を離れる人もいる。農家希望者を募集し行政が必要な資金を支援するなど、受入体制を整備できればよい。
- 一人で月30万円をコンスタントに稼ぐビジネスの創出は難しいが、3万円のビジネスを複数持つことは可能。このような働き方をチームでやることで、お互いをカバーできる。

**【計画に関するその他のご意見】**

- 行政に期待することは、今後30年後の北海道を見据えて人口400万人時代を意識し政策を実行していく上で、従来の常識やルールにとらわれないで新しいことにチャレンジす

ることであり、このような思いを持って地域と関わっていただきたい。

- 視点・論点でまとめられている基本的な考え方や地域構造、人材確保、対流の促進など施策の完成度は高いものであり、北海道開発局でしかできないことも多くあると考えるが、北海道開発局をいかしてどう実現していくかが伝わってこない。この部分を道民に見える形で行えば、地域の様々な活動の後押しとなる。
- 北海道開発局や国土交通省が「新しい公共」という言葉を初めて使って新しい施策を提案したにもかかわらず、他省庁が自分たちで考えたかのように使っている。国土交通省は自分たちの良い施策を道民に知ってもらおうよう力を入れていくべきと日頃感じている。
- 行政、地域、企業、大学は本当にどこまでやるかという本気度が試されている。それによって地域間格差が出てくると考える。
- 北海道総合開発計画は昭和 27 年から長い年月で進められており、農村地域においても自然を破壊しない事業など様々な恩恵を受けてきた。この環境があったからこそ地域資源を活用でき、癒やしや心の豊かさが生まれてくるものと感謝している。
- オリンピック・パラリンピックを見据えた合宿誘致の問題は宿泊施設。バリアフリーの部屋が少なく、宿泊施設のある札幌との間をバスで送迎しているのが実態。地域に合宿施設があれば良いが、オリンピック・パラリンピック後の活用が課題。